

Title	中国青島における社会的・文化的変容と「名づけ」の実践
Author(s)	王, 愛静
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/46690">https://hdl.handle.net/11094/46690</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	王 愛 静
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学位記番号	第 19736 号
学位授与年月日	平成 17 年 6 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	中国青島における社会的・文化的変容と「名づけ」の実践
論文審査委員	(主査) 教授 木村 茂雄 (副査) 教授 深澤 一幸 助教授 坂内 千里

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国青島市を対象に、社会的・文化的変化の中における人名の変化および人々の名づけの実践を考察するものである。

1949年10月、中国では共産党政権の社会主義国家が設立され、それ以来、国家イデオロギー・社会構造・経済・人口などさまざまな面で社会主義革命が展開され、人々の生活のあらゆる面に影響を与えた。そしてこのような激しい社会的・文化的変容の中で、日常世界の一部である子孫への名づけも大きく変化してきている。

本論文は、社会的な背景というマクロな視点、および個人の名づけ実践というミクロな視点の両面から人名の変化を考察する。その主な目的は、建国以来の社会的・文化的変容の中で人名がどのように変化したのか、個々人が各時期において、社会の変化にどのように適応しながら名づけを実現したのか、また、伝統的な名づけ習俗はどのように変容してきたのかなどを明らかにすることである。調査対象は、農村地域に住んでいる峰村李氏と都市地域に住んでいる辛町李氏である。同じ宗族の異なる地域集団を考察することによって、農村と都市の地域差およびその要因を明らかにすることも本論文の1つの目的である。手法としては、現地での聞き取り調査を主な方法とし、住民簿や族譜・地方誌の調査を補助的な方法とする。住民簿や族譜の人名資料の集計により、人名形態の時系列的変化を把握した上で、現地の人々から具体的な名づけの経緯を聞き取り、社会的・文化的変化における個人の名づけ行為の意味を分析する。

第1章の序論では、中国に関する人類学的研究および人名に関する先行研究を踏まえた上で、以上のような研究視点、研究目的、研究対象について述べた。

第2章から第5章までは本論である。まず第2章では、調査地の地理的・歴史的・社会的な概況と調査対象とする李氏宗族の形成・歴史の概略を記述し、調査地における名づけの習俗（輩行字命名、祖先の諱の回避など）を紹介する。

第3章では、建国後、人名形態（輩行名、一字名、疊名、人名用字）が年代的にも社会的時期にも著しく変化してきたことを統計的に示す。すなわち、輩行名の連続的な減少、非輩行名の一文字名や疊名の増加、女性名の普及などである。これらのデータは次章以降の考察における基礎資料としても使用する。

第4章では、第3章で明らかにした人名変化の社会的・文化的背景を考察した。それは以下の諸点にまとめられる。建国初期の土地改革や文化革命は、祠堂・族譜・墓の破壊によって宗族組織の表象を消滅させただけでなく、「階級

闘争を要とする」社会主義イデオロギーの確立のために、過去の宗族観念や宗族意識そのものを変えることを要請したが、それはこの時期輩行名が減少しつづけ、「国」「偉」「建」「紅」などの文字の使用頻度が高くなる社会的・文化的要因となったと考えられる。この「宗族否定」が人々の意識に与えた影響は、それ以降も長い間力を持ち続けている。さらに、強制的な計画出産が伝統的な「多子多福」の考えを変化させ、輩行名の減少をある意味で必然的なこととした。一方、80年代からの改革開放がもたらした経済水準の向上や村民の思想意識の多様化は、一字名と疊名の増加、人名用字の新鮮化、姓名判断による命名の出現などと関連していると考えられる。90年代末になって、李氏宗族活動が公的な回復をみせ、それにともなって輩行名も今後は少し増えるのではないかと見込まれる。また、建国以来の女性名の普及は、国の男女平等の政策および戸籍制度と集団生産がもたらした結果といえるであろう。

以上の諸点は峰村李氏と辛町李氏の人名変化に共通する点であるが、両者には次のような相違も見られる。第一に、土地を生存の基本とし、外部と接触する機会が少なかった峰村李氏に対し、辛町では早くも20世紀初頭に、ドイツや日本の工場の進出に伴い、村以外の世界との接点広がった。これは、辛町李氏には20世紀前半から非輩行名や新鮮な一字名が見られ、女性が峰村より早く大名を持つようになったことの一つの背景だと考えられる。第二に、峰村では、他姓族が存在しないため、村内の対立は即ち族内の対立になった。実際、反右派闘争や黒五類の批判などはすべて同一族内で行われた。それに対し、辛町李氏は、かつてから他姓との共存をはかりながら李氏支族を発展させてきた。建国後の政治運動の相互摘発・批判は、宗族内部に向かうより他姓を批判の対象とする傾向にあった。第三に、国の土地改革や経済改革は農村を対象に、あるいは農村から始められたもので、辛町李氏社会には峰村のような顕著な変化をもたらしていない。第四に、辛町李氏の出身者には社会的地位の高い人物がおり、宗族の象徴である祠堂の保存、共有墓地の建設、族譜の再建に有力なリーダーシップを発揮し、辛町李氏の宗族凝集力に寄与している。このような点が、60年代以降、辛町李氏の輩行名の減少が穏やかで、しかもその比率が峰村李氏を上回っている要因であると考えられる。

しかし、このような社会の変容の中で、個々人はただ社会に翻弄されるだけではなく、それぞれの状況に合わせてその変化に適応しながら生きていることも観察できる。ブルデューの言葉で言えば、人々は「戦略」を駆使して「社会的ゲーム」(社会的営み)に参加しているのである。つまり、その時々の状況の変化に巧みに対処しながら実践を生み出しているといえる。人々の名づけ行為と社会・文化の変容との関連をより深く明らかにするため、第5章では、これまでの人名研究ではほとんど触れられていなかった、主体としての個人からの視点に基づく考察を行った。9つの事例を分析した結果、以下のような点が明らかになった。

第一に、同じ社会背景においても、個々人の経験、社会的地位、それぞれの考え方などにより、社会に対応する姿勢や採用する行動は決して一律なものではないという点。例えば、宗族組織が崩壊し始めた人民公社時期にも、人々の大多数は輩行字命名法にしたがって命名している。彼らにとっては、代々伝えられてきた輩行字命名は既に身にしみ慣習の一部であり、急には捨て去ることはできないものであったが、その一方で、社会の変動も敏感に感じとり、それに対する反応を示している。その中には、伝統的な名づけを保留しながら時代色の強い文字を名前に入れた人がいれば、政治とかかわりなく、時代的な色彩が薄い文字をあえて用いている人もいる。それに対して、共産党の幹部や右派分子、革命に情熱を持つ若者などは、革命的な名前を子供に名づけたが、その理由もそれぞれ異なっている。彼らは自分の立場の変化に応じ、損益得失を考慮した上で選択を行っているのだといえる。第二に、同じ人物が生涯にわたり異なる命名観を示している点である。命名観の変化の契機は、時代の大きな出来事とも連携しているが、個人の経験によるものも大きい。たとえば、輩行名を嫌っていたある女性は、それを進んで受け入れる方向に変化し、最後は娘にも輩行名をつけるようになったが、それは、彼女の大学時代における宗族の人々からの援助、新たな族譜への女性名の記入などの要因によるものである。第三に、名づけには多くの要素が絡んでおり、人々はそれぞれの状況で、意識的あるいは無意識のうちに、それらの要素の重要性を押し計りながら取捨選択を行っているという点である。たとえば、伝統的な輩行名をつける意志が強い場合でも、それが祖名の諱を犯すことになるときには、後者を優先的に考慮している。あるいは、名前の画数がよくなくても、あえて輩行名をつけるケースも見られる。第四に、ほとんどの名づけは1人の人間の単独の作業ではなく、家族や親族あるいは社会のほかの成員や機関との協調、協働の結果であるという点である。以上のように、個々の名づけには、社会の中で生きているための戦略的な知恵が窺われているといえるだろう。